

## 序 近代・文学・ナショナル アイデンティティ

### 一、問題意識

冷戦が終わり、第二次世界大戦以後おそらくもっとも激しい民族紛争と対立が続いたと言える二十世紀の最後の十年、学問的にもナショナリズム成立期の様相を指摘しつつの批判は盛んだった。おかげで、ナショナリズムが「近代国民国家」の産物であることも明らかになり、そのことに関する認識は十分ではないにしろもはや常識にはなってきたと言っていいだろう。

しかし、ナショナリズムに対する批判が高まるにつれて、そのような動きや認識に対する反動的な動きもまた強くなりつつあるのも事実である。たとえば昨今の「新しい歴史教科書」作りをめぐる一連の事態はそのような動きを代表するものといっていだろう。また、その時韓国や中国が激しく反発することでそのナショナリズムを露にしていたことが現すように、一国のナショナリズムは常にまわりとの関係において生産され波及する。

しかし、ナショナリズムの問題点が様々な形で指摘されてきたにもかかわらず、「偏狭な」ものではない「開かれた」ナショナリズムを目指すといったような名目のもとにいまなお、ナショナリズムはいずれの国においても強い勢力を持ちつつけている。そしてそれは、ナショナリズム批判がまだまだ十分ではないということとともに、人々における自己のナショナル・アイデンティティにたいする信頼がいまなお強固であることを示している。それは、自らの存続のために、ナショナル・アイデンティティという幻想を「国民」に植えつけてきた「近代国民国家」の結果でもあるが、ともかくも、もはや単なるナショナリズム批判だけでは民族紛争の波及を防ぐことはできないことが明白になってきたとも言えるだろう。

ならば、もう、ナショナリズムではなくそれを支えるナショナル・アイデンティティ自体を問うことが必要なのではないか。言葉や文化や血縁の同質性をその根拠とするナショナル・アイデンティティ自体が、今まで信じられてきたように本質的なものでも不変のものでもない（注1）ということを確認しなおすことのみが、ナショナリズムの呪縛からの脱出を可能にしてくれるのではないか。本稿はまずそのような問題意識から出発している。

そもそもナショナリズムが、近代の成立期に国民国家の成立とともに生まれた富国への夢とともに派生し、強化されていったものであることはよく知られている。それは軍事

大国化を招き、自らの欲望を帝国主義化し、それはやがて植民地とされた国々における「抵抗」ナショナリズムの正当性をも支えた。

エマニュエル・ウォーラーステインは、「民族主義も国際主義も、資本主義の展開の歴史に表れた趨勢を、ともにその出発点としている」としながら「両者ともに、この世界システムの中で権力を握るひとたちの目的達成に手を貸す一方で、このシステムに反逆する勢力を勇気付けるという両様の役割を果たしてきた」としている。「それゆえに、これらの二つのイデオロギ的趨勢を支えてきたアイデンティティの意識は、根源的に備わっていた規定のものではなく、世界システムの展開のなかで特定の役割を演じ、特定の目的を追求してきた政治勢力による意図的な圧力の元で、生み出されたもの」という主張やそこで「それぞれの国民や領土を自国のものとする主張」に、「いかにも独自性と特異性を持つかを印象付ける意図」（『ポストアメリカ：世界システムにおける地政学と地政文化』、藤原書店、1991・9）が跋扈するとする指摘は今ではもはや新しいものともいえないだろう。

ウォーラーステインが、「近代」を「世界資本主義」を軸に語ったことにたいしてギデンズは、「近代」を「監視、軍事力、資本主義、産業主義」の四つの軸で語っている。それを「モダニティ」と称していて、ギデンズによるとモダニティ＝近代性とは「およそ十七世紀以降のヨーロッパに出現し、その後世界中に影響が及んでいった社会生活や社会組織の様式のこと」でもある。軍事力が発達し、産業化が軍事力と結びついていったことで「二十世紀は戦争の世紀」となったが、それを支えていたのが「領土」の感覚であることはいうまでもない。ギデンズは、前近代では「領土」の「境界」が明確ではなかったのに近代に入って領土に対する一元化された統制が可能となり、「監視」体制が整って「国民国家にとって必須のもの」となる軍事力の掌握が可能となったと指摘している。「「逸脱」にたいする統率的管理」こそが国家が暴力手段を独占できた背景にあったとするのである（注2）。「国民国家」とは、この四つの特性をすべて持つものであったが、ナショナル・アイデンティティとは、その「国民国家」を支えるために考え出された、「近代」のモダニティを代表するものとも言うるだろう。

ナショナル・アイデンティティの感覚を支えているものとして言語や血統とともに文化がある。その「文化」を共有する「文化的共同体」とは「共有された審美的感情によって統合された人々の集団」（酒井直樹『日本思想という問題 翻訳と主体』131頁、岩波書店、1997・3）だが、「文化」は「国家と歩調を合わせることのできる特定の階級のための弁別や価値評価の体系」であるという点で「排除の体系」にほかならず、「文化とは民

族国家、祖国、共同体、帰属などといったものについての侵略的な感覚にしばしば関係がある」(エドワード・サイード『世界・批評家・テキスト』19-20頁、法政大学出版社、1995・7)。実のところ「あらゆる文化は混血で、多様で、驚くほど弁別的で多層的」(同『文化と帝国主義』、みすず書房、1998・10)であるにもかかわらず、ナショナル・アイデンティティと結びつけられることでそのことは隠蔽され、やがて忘却されるのである。

「排除の体系」である文化の中でも文学は「国語」信仰とあいまってナショナル・アイデンティティ形成にもっとも大きく寄与した分野と言えるだろう。美術や音楽に比べても、「文学」は、それが言語の習得や考え方・習慣の理解を必要とするという点でもっとも閉鎖的な「排除の体系」だったとも言えるのである。そして、文化的「差異」なるものが、はじめから存在するのではなく、「文化的差異の記述が文化的差異を産出し制度化する」(酒井直樹、前掲書151頁)ものだとしたとき、その先端に立っていたのが「文学」であったこともまぎれもない事実である。「文学」とは、「言語」で構成されるものであるだけに、「差異」を語るにはもっとも適切な対象だったのである。

しかし、いわゆる「我らの文化」＝文学とは、その時点までの文化的記憶をいわば「総合化」したものであり、近代世界における「我らの文化」とは、純粋な「地域製作」ではなく、「それ以前の文化的な借用や影響の痕跡を常にとどめている」(ジョン・トリムソン『文化帝国主義』185頁)ものでしかない。

ギデンズは先の文献で、モダニティのダイナミズムは時空間の拡張＝「秩序化」によるとしながら、変化が秩序(理論)をつくるのではなく、秩序(知識)が変化(行為)を作ることにも指摘している(60頁)。「社会生活に関する体系的知識の生成は、システムの再生産に不可欠な要素」(73頁)であるという図式を借りるならば、「近代日本」が「日本近代文学」を作ったのではなく「日本近代文学」が「近代日本」を作ったのだともいえるだろう。

## 二、研究動向

「日本近代」の「文学」の代表的存在として夏目漱石がある。なにしろ、(戦後)「漱石作品はそれぞれの教科書の文学教材の核となっていく」(関口安義「漱石と教科書」、『夏目漱石必携Ⅱ』、学燈社、1982・5)存在だったのだから、教育がそれまでの「記憶」の

伝授の役割をしているとしたら、「夏目漱石」とは二十世紀をとおして、常に「近代日本」の「記憶」の「核」を作ってきた人物といっても過言ではあるまい。西谷修は、「近代日本の公式の文学史というのは、近代化というプロセスの中で目覚めた個人が、社会との葛藤を通して自己を確立するというシナリオがつねにあって、じっさいそのドラマに参画した者だけが近代文学の正統的な作家だということになっている」としながら「近代的な主体として生き、その意識を自分で担う」者が「洋行して作家にな」（西谷修・酒井直樹対論『＜世界史＞の解体 歴史・主体・翻訳』88頁、以文社、1999・4）ったとしているが、漱石はそのような傾向を代表する作家でもあるのである。しかも漱石は、単なる「文豪」としてあがめられていただけでなく、実際にもっともよく読まれ、もっとも人気の高い作家でもある（「朝日新聞」2000・6・29）。文庫版『心』が、近代日本でもっとも多く売れた文庫であることを考えるにつけても、漱石という存在が「近代日本」の形成に大きくかかわっていたとするのは間違っていないだろう。

近代において圧倒的に支持されていた漱石とそのテキストは果たしてどのように「日本」というナショナル・アイデンティティとかかわっていたのだろうか。

近代化へと盲目的に走る「近代日本」を批判し、「自己本位」という言葉で「西洋」にたいする毅然とした態度を示し、帝国主義や軍国主義を批判し、さらには天皇にも距離をおくことができた反体制主義者としてのリベラルな漱石、そのようなイメージが、長い間の漱石像の代表的なものだった。近年に入って漱石にたいする批判が一部で始まっているが、それでも上記のような漱石像はまだ大きくはゆらいでいない。漱石批判の一翼を担ってきた桂秀美も「国民文学漱石は当分のりこえられまいと嘆息」（桂秀美「歴史修正主義の基本構造」、「批評空間」Ⅲ-1、2001・10）するほどに、「漱石」の存在はいまなお大きいのである。

たとえば、かつて「漱石」を「倫理的」な読みから解放して以来漱石読解において新鮮な刺激を与えつづけてきた小森陽一は、漱石に対する批判に対して「すべての小説言説で同じ態度が貫かれているわけではない」（『世紀末の予言者・夏目漱石』254頁、講談社、1999・3）とし、指摘されている漱石テキストの問題を「矛盾を孕んだ漱石の言説」としながら「漱石の言説に内在した漱石批判」（同、254頁）を読みとろうとしている。

そのような小森にたいして「装いを新たにした＜聖典＞の再構築でしかないのではないか」（片岡豊「漱石の＜顔＞」、「日本近代文学」第60集、1999・5）というような批判もすでに出ているが、それでも一般的には（学界でも）「漱石」の権威は崩されてはいな

いと言ふべきだろう。

既存の漱石批判はすでに指摘されているように「漱石が進歩派なのか保守派なのかといった二者択一的議論」に傾く傾向が強く、その意味では「あまり短絡的に漱石と天皇を結びつけるような過度の政治的読み」（押野武志「漱石と「大逆」事件論争の行方」、『日本近代文学』第67集、2002・10）が多かった。「問題は天皇制に屈服したかどうか」ではなく、「どうでもいいようなテキストの見やすいイデオロギー性など批判してもしょうがない」（同）という指摘もまた、的を射た指摘と言えるだろう。

押野は「漱石批判はいかにして可能か。まずはなぜ漱石を、なぜ天皇を、しかも今文学研究の場で批判しなければならないのかを改めて捉え直すところから始まるだろう」とも言っているが、「なぜ漱石を」「今文学研究の場で批判しなければならないのか」といった必然性については今まで述べたことで提示できたのではないか。そして私は、数年前のものだが、「<聖域>化を内在的に解体させ、より多様な問題を提示する方法であると思われるジェンダー論や文化研究、あるいは国民国家論やポスト植民地主義といった問題意識はまだ十分なひろがりや深化を見せてはいない。そしてそれらは単に従来の漱石像を解体し、あるいは批判するために必要なのではなく近代の陥穽そのものを問うためにこそ必要なく思考>なのだ」（松下浩幸「聖域を開く思考」、『漱石がわかる。』153頁、朝日新聞社、1998・9）とする問題意識を受け止める形で本稿を進めたいと思う。というのも、そのような試みは少しずつ出てはいるが、いまなおそれぞれの関心にしがたっての個別の論であるため、漱石テキストの新たな全容はまだ十分には見えていないと思われるからである。

### 三、目標と意義

果たして近代日本の文豪夏目漱石はどのような人物で、そのテキストは何を提示していたか。そのこと自体を見ることが、むしろその「政治的立場」をも明らかにしてくれるのではないか。本稿はまず、そのことの解明に目標と意義をおいている。

そして、漱石のほかに鷗外や「在日」作家金鶴泳などにおいて自己のナショナル・アイデンティティの意識がテキストにおいてどのように働き、その結果としてのテキストはどのようなものになっていったのか、さらにはどのように受容され、そのような形での受容は何を意味するのかをあわせて論じたいと思う。

すなわち、「近代日本」というナショナル・アイデンティティの形成に「日本近代文学」はどのようにかかわっていたか、そしてナショナル・アイデンティティとは何を志向するものだったのかを明らかにすることを本稿は最終的に目指している。

断っておきたいのは、たとえ批判的スタンスをとるとしても、私の関心は批判自体にあるのではない。特定の時代になぜ、そのテキストが規範化されカノン化されたかを考察し、その背景にある欲望を見ることこそが私の関心事である。すなわち、本稿は単に「カノン」批判に目的があるのではなく、近代のある時期、「日本」と名づけられた地域における数人のエリートやその周辺の人物の思考をその小説テキストをとおして見ることで、「近代」の問題を見出し、次なる時代を生きるヒントとすることに目的があるのである。

知的生産物と社会との関係を見ようとする本稿の作業は、ナショナル・アイデンティティというものごどのように文学を拘束するのを見ることでもある。それはナショナル・アイデンティティの暴力性を見てゆくことにもなるだろう。そういう意味では、本稿は「漱石」を中心に扱うが、「漱石文学とは何か」というような問題を設定してはおらず、〈近代〉という時代性が漱石という固有名においてどのように現れているかを見ることを問題としている。

近代日本がなぜ漱石を文豪にしたかを見ることは、日本近代文学研究が見ないようにしてきたものをも明らかにしてくれるはずである。そして、ナショナル・アイデンティティの暴力とともにその背後で息を潜めて生きてこなければならなかった人たちの思いとそこに新たに巣食っていた欲望を見ることは、新しい共同体のあり方の模索を可能にしてくれるかもしれない。本稿は、未来においていかなる共同体を目指すべきかを模索するための、「文学」を対象としたささやかな試みである。

そのために本稿はまず、漱石の西洋体験を軸に漱石テキストを読んでいく。重要な作品とされている『吾輩は猫である』や『明暗』や『道草』を対象にしなかったのは、「ナショナル・アイデンティティ」というキー・ワードで接近しうるもの、という条件によるものでもあるが、同時に、『猫』から『明暗』までという「漱石」の全体を一通り論じて全体像を構築しておきたい欲望をあえて自制しようとしたことにもよる。

そして、漱石と同様「文豪」のもう一人である森鷗外の、これまたもっとも広範に受容された『舞姫』を分析する。また、いわゆる文学者ではないが白樺派の一人である宗教学者で民芸学者でもあった柳宗悦と朝鮮・アイヌ・沖縄のかかわりを見てゆく。

次に金鶴泳を論じる。今までの『日本近代文学』の範疇からは漏れがちだった「在日文

学」作家をあえて同一の場所で論じるのは、最近言われている「日本語文学」として、という意図もあるが、さらに、「日本」というナショナル・アイデンティティ構築の背後でどのようなことが起きていたのかを見ておきたいためである。

次に、そのようなナショナル・アイデンティティが、植民地の人々においてはどのように習得されていったのかを植民地末期のいわゆる「親日派文学」をとおして検討し、最後に、一冊のアメリカ文学受容の様相を見ることで、「日本」「文学」なるものの近代的ハイブリッド性を示したい。人種において「肌の色・文化というシニフィアンを、人種類型、血の分析、人種的・文化的な支配あるいは退化のイデオロギーといったシニフィエから解放できるのは、差異と循環の可能性を認めたとき」（ホミ・バーバ「他者の問題」、『現代批評のプラクティス 4』、189頁、研究社出版、1996・4）とするなら、「文学」においてのそのような「循環」の事実を示すこともまた、ナショナル・アイデンティティの解体には有効と思われるからである。

#### 注

1)たとえば、「アイデンティティを構築しているその他のどんな基盤的なカテゴリーセックス、ジェンダー、身体の二元体—が、実は自然や起源や必然という結果を作り出す人工的な生産物」（ジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル』序文、青土社、1999・4）や、「アイデンティティは決して単数ではなく、さまざまで、しばしば交差していて、対立する言説・実践・位置を横断して多様に構成される。アイデンティティは根源的歴史化に従うものであり、たえず変化・変形のプロセスのなかにある。」「アイデンティティは自己の物語化によって成立する」「アイデンティティは差異と排除を示すものの所産」（スチュアート・ホール「誰がアイデンティティを必要とするのか?」、スチュアート・ホール他編『カルチュラル・アイデンティティの諸問題』、大村書店、2001・1）などは最近におけるもっとも重要なアイデンティティ論といえるだろう。さらに、小坂井敏晶『民族という虚構』（東大出版会、2002・10）は、「人種」や「民族」の分け方自体が恣意的であると指摘していて多くを示唆している。

2) ギデンズ『近代とはいかなる時代か—モダニティの帰結』（而立書房、1993・12）